

CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開 —ハイブリッド型授業による「総合日本語」1-4の再構築—

早稲田大学日本語教育研究センター¹⁾

1. はじめに

本稿の目的は、2023年度より開始した総合科目群のオンライン化について、「総合日本語1」から「総合日本語4」の事例をもとに、その課題と展望を述べることである。

日本語教育研究センター（Center for Japanese Language, 以下、「CJL」）では、2023年4月より、総合科目群を構成する「入門日本語」、「総合日本語1」から「総合日本語6」の7科目において、オンデマンドと対面によるハイブリッド型授業を開始した。「入門日本語」では週2コマのうち1コマ、「総合日本語1」から「総合日本語4」では週5コマのうち2コマ、「総合日本語5」と「総合日本語6」では週3コマのうち1コマがオンデマンド化され、そのための教材が開発された。また、すでにオンライン化されている「漢字1」から「漢字4」に次ぐ「漢字5」、「会話1」と「会話2」では、同期型オンライン授業の教材開発が進められ、2024年度から運用を開始する予定である。

総合科目を対象としたハイブリッド型授業と同期型オンライン授業の開発を目的とした「CJL 総合科目群オンライン化のための研究プロジェクト」（寅丸他 2022, 2023）は、2021年度より検討を開始し、2022年度にCJL研究プロジェクトとして承認された。本プロジェクトは、オンライン初級科目の開設（木下 2020）、オンラインによるレベルチェックテストの開発（寅丸他 2021, 2022, 岩下他 2023a, 2023b）、CJLスタンダードの開発（久保田・濱川 2022）とともに、CJLが日本語学習者（以下、「学習者」）の「世界へ向かうプラットフォーム」（池上 2023）として更なる飛躍を遂げるための基盤プロジェクトの一つである。学習者は各々の自己実現に向けてCJLで日本語を学び、「次の場所」に挑戦する。CJLは学習者の学びと生活の居場所であると同時に、学習者が未来のある世界へ向かうためのプラットフォームとしての役割を担っていると言える。そして、その教育活動の特色として挙げられるのが「主体性」「多様性」「開放性」（館岡 2016）である。

CJLでは、学習者の主体性を重視した多様で開放的な科目展開と履修システムの構築を行っている。CJLのプロジェクトにおいても、その根本は一貫している。CJLスタンダードの開発はCJLが提供する日本語科目のレベル基準の策定と整理、レベルチェックテストの開発は学習者が自身の日本語レベルに応じた履修科目を主体的・自律的に選択できるようになることを目的としていた。一方、本プロジェクトの目的は、学習内容に適した授業形態を提供することで授業の質を担保すると同時に、学習者自身による学習の進捗管理を促し、学習者の主体性と自律性を育成することであった。

センター研究プロジェクトとして承認後、本格的に教材開発と授業準備が進められた。本プロジェクト承認前から独自開発を進めていた「漢字」を除く科目については、教材開

発期間が実質1年という厳しいスケジュールであった。しかし、CJLでは、2020年度から本格的に拡大したCOVID-19の影響が縮小し、対面授業が再開する2023年度までに総合科目のオンライン化を実現させることが必須課題であったと言える。その主な理由としては、次の3点が挙げられる。

1点目は、学習者の主体性・自律性を育成する教材の必要性である。CJLは学習者がレベルチェックテストを受験し、履修科目を自由に選択するシステムを採用している。また、テーマ科目ではレベルの異なる学習者が共に学べる科目が展開されており、1科目に複数のレベルの学習者が履修していることも珍しくない。学習者一人一人に寄り添った教育を行うには、一斉対面授業に加え、学習者が自身の学習環境や能力に合わせて主体的・自律的に学習できるような多様な教育方法が期待されていたと言える。2点目は、大学教育、および日本語教育界の潮流である。COVID-19拡大以前から、すでにオンライン授業への関心と需要は存在していた。2020年より教育機関において選択の余地なくオンライン化が進んだが、このような事態は潜在需要が顕在化したものであり、時代の要請であったとも考えられる。今後は、オンラインと対面各々の長所を生かした授業が常態化していくと予想される。3点目は、授業形態が短期間に変化することによる学習者と教員の負担である。COVID-19下で行われていたオンライン授業を対面授業に戻した後に、さらにオンライン授業へ転換するという事態は、学習者と教員に多大な負担を強いることになる。

以上の理由から、CJLではCOVID-19を機に、新たなオンライン授業の実現と教材開発が急務となった。さらに、それらに加え、以前から課題とされていたCJLの教育理念と使用教材の教育理念との齟齬や、レベル間における使用教材のアーティキュレーションの不足という課題も同時に解消することが求められた。CJLでは、2020年度より教育理念に基づいたCJLスタンダードの開発を進めてきたが、当時の使用教科書は、これらの教育理念やスタンダードと齟齬を生じていた。また、学習内容やレベルが教科書を基準に設定されていたため、学習内容を柔軟に調整したり、レベル間のアーティキュレーションを調整したりすることが困難であった。総合科目群のオンライン化と同時に、アーティキュレーションに関わる課題も解決・改善することが期待されていたと言える。

新たなオンライン授業の実現と教材開発の条件は次の4点であった。(1) 学習者一人一人の日本語学習に寄り添うと同時に学習者の主体性・自律性を育成できること、(2) CJLの日本語教育理念とスタンダードに準拠していること、(3) 教育内容を柔軟に調整でき、かつレベル間のアーティキュレーションがとれていること、(4) 大学教育および日本語教育に期待される人材育成の方向性と時代の要請に適っていることである。

特に(1)と(4)は、学習者の将来、および今後の日本語教育に繋がるという点で重要である。教育とは学習者の人間形成に寄与する営みである。教育機関において育成が目指される「21世紀市民」(文部科学省2008)とは、「先行きの見えない変化の激しい時代の中で、変化自体をよりよい方向に向かわせることができるような心身ともにしなやかでたくましい市民」(国立教育政策研究所2016, p. 12)とされている。また、早稲田大学では、「グローバルリーダーの育成」を掲げているが、「グローバルリーダー」とは、「何処にいても、またどのような分野で活躍するにしろ、地球市民一人ひとりの幸せの実現をリードする能力と意志を持ち、地球規模の視点で思考・実行する人材」とであるとされている。

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

る²⁾。「21世紀市民」および「地球市民」における最も基礎的な能力として期待されているものが、VUCA³⁾の時代においても、他者とともによりよい社会を創造していける主体性（エージェンシー）、自律性、協働性であろう。そして、それらを基盤として社会で自己実現を果たしていくためには、問題発見解決能力、創造的構想力、批判的思考力、異文化理解力等が求められる。CJLにおける日本語学習の過程においても、それらを育成できる授業や教材が期待されていると考えられる。

2. 本プロジェクトの概要と経緯

本プロジェクトの対象科目は、「総合日本語1」から「総合日本語6」、「入門日本語」、「会話1」、「会話2」、「漢字1」から「漢字5」の全14科目であった。2021年度に「総合日本語1」から「総合日本語6」、「入門日本語」は市販教科書を使用し、「会話1」と「会話2」、「漢字1」から「漢字5」はオリジナル教科書を開発することに決定した。

「総合日本語1」から「総合日本語4」においては、総合科目の授業内容のうち、文型学習をオンデマンド化し、文型学習動画教材（以下、「文型学習動画」、「総合日本語1」と「総合日本語2」は英語、「総合日本語3」と「総合日本語4」は日本語ナレーション付き）の作成を決定した。文型学習動画とは、これまで教員によって各クラス個別に行われていた文型の導入と説明を動画化した教材である。2022年度末までに、「総合日本語1」から「総合日本語4」を完成させ、本学のLMS（Learning Management System）であるWaseda Moodle（以下、「WM」）に設置した。学習者は本動画を視聴し、WMに設置されたワークシートの課題やテストに取り組むことによって文型理解を深め、授業では文型の運用練習と多様な活動を行う。また、各クラスのWMに学習対象となる文型学習動画を設置すると同時に、CJLの授業履修者全員が他レベルの文型学習動画も閲覧できるようなシステムにしたため、学習者はレベルに関わりなく、予習や復習の際に自由に全文型学習動画を閲覧できるようになった。教科書を変更しても使用可能な汎用性ととともに、学習者がいつでもどこでも、どの文型でも学習できる利便性を確保したと言える。さらに、「わせた日本語サポート」における日本語自律学習支援（寅丸・吉田2021）⁴⁾においても、アドバイジング・セッションでこの文型学習動画を使用できるように対応し、授業、自習、学習支援の三つの場で有効活用し得るシステムを構築した。

今後は、高等教育機関の使命として学術的な日本語能力の育成を目指し、「総合日本語3」から「総合日本語6」においては文型学習に加え、レポート作成学習のオンデマンド化を進め、2025年度には運用を開始する予定である。その他、「入門日本語」では、2023年度よりコース内容に即した教材と仮名の説明用動画を運用している。「会話1」と「会話2」では、2024年度より新たな教材が提供される。「漢字」では「漢字5」の教材開発を終え、2024年度より全レベルが新教材となるなど、総合日本語科目群の授業のオンライン化は着々と進められている。

以上のように、「CJL 総合科目群オンライン化のための研究プロジェクト」は、総合科目の再構築を目指す大規模プロジェクトである。本稿では、特にその中から、2023年度春学期に他科目に先駆けてハイブリッド化を実現し、再構築を進める「総合日本語1」か

ら「総合日本語4」の事例を取り上げる。2023年度春学期の授業を運営管理したレベルコーディネーターの視点から、各レベルの学習の目標と内容、授業の特徴、今後の展望を報告する⁵⁾。

3. 総合日本語1

3-1. 学習の目標と内容

「総合日本語1」は、CJLスタンダードズの初級前半レベルに位置し、初級前半の学習者を対象としている。主な目標は、初級前半の文型および語彙を学習し、日常的な場面で、場面に応じた適切なコミュニケーションができるようになることである。具体的には、単純な情報交換をすることや、身近なことについて書かれた短く簡単な文章が読めること、かつ自分のことを短い文章で書けることである。教科書は『まるごと 日本のことばと文化 初級1 (A2) 【りかい】』『まるごと 日本のことばと文化 初級1 (A2) 【かつどう】』を使用している。

授業形態としては、週5コマの授業を対面型授業（以下、「対面授業」）とオンデマンド型授業（以下、「オンデマンド授業」）を並行して行っており、対面授業3コマ（火曜日2限、木曜日1, 2限）、オンデマンド授業2コマ（文型学習動画1コマ、書く活動1コマ）で運営されている。

オンデマンド授業の文型学習動画は、対面授業の前の予習用として制作されたもので、計60文型を扱っており、各動画は「文型表紙」「導入 Introduction」「活用 Grammar」「意味 Meaning & Usage」「会話 Dialogue」で構成されている。

一方、もう一つのオンデマンド授業である「書く活動」は、教科書【りかい】にある「作文」と、特定のテーマについてよりまとまった文章を書く活動である。毎回担当教員が担当日の作文課題として、テーマ、作文を書く際の留意点や提出期日、評価をまとめたPDFファイルをWMに掲載する。学習者はそれをよく確認した上で、指示に従って作文を書き、期日までに提出することになっている。その週に学習した文型を用いて書くことを意識し、語彙や表現なども調べて書くように勧めている。

対面授業では、火曜日は教科書【りかい】で文型を学習する。木曜日には教科書【かつどう】を学習し、それを活かして「話す活動」を行っている。また各種筆記テストと会話テストも対面授業で実施される。

3-2. 授業の特徴

本科目の特徴は、文型の説明より先に教室活動を通して文型理解を促し、よりインタラクティブな指導によって日常生活ですぐに使える日本語能力の育成を図れるように構成されていることである。授業の流れは、「活動授業（対面授業）で文型のルールを推測する→文型学習動画（オンデマンド授業）で自分の理解の齟齬を修正したり深めたりする→文法授業（対面授業）で自分の理解を確認し、運用練習を行う→書く活動（オンデマンド授業）を通して産出する」となっている。

具体的には、木曜日の対面授業では、前述の通り、教科書【かつどう】を学習するが、

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

授業に参加する前に学習者は事前に語彙クイズを受け、語彙の予習をしてから授業に臨むことが求められる。そして、この授業では、明示的な文法の説明は行われなため、学習者には該当する課の文型学習動画を事前に視聴してから授業に参加することを勧めている。この授業は口頭練習を中心に行うものであり、学習者は授業で行われる様々な活動を通して、実践力を身に付けている。

次に、学習者はオンデマンド授業において文型学習動画を視聴し、木曜日の対面授業で行った様々な活動から推測していた文法のルールを、文型学習動画を通して自分で確認し理解する。なお、学習者は文型学習動画の視聴後、学習課題として期日までにワークシートを提出することになっているが、この課題を通して該当する文型の活用や使い方の理解を深めることができる。

翌週の火曜日の対面授業では、木曜日に行った活動を通して自分で考えていた文法のルール、および文型学習動画の文法について明示的に説明を受ける。火曜日の対面授業は、教科書【りかい】をベースにした文法の説明を中心に行う授業であり、オンデマンド授業の文型学習動画の内容を補助する仕組みとなっている。教員は、学習者が提出したワークシートのフィードバックを行い、該当文型の正しい使い方を確認し、かつ運用練習をしっかりと行っている。本科目で使用している教科書【りかい】は、文法積み上げ式ではない。そのため、学習者は教科書で提示されている状況や場面で使用される文型として理解する必要がある。担当教員は既習文型を適切に混ぜながら文型説明を行うなど、ある程度文型の知識が積み上げられていくように工夫を凝らしている。

最後に、もう一つのオンデマンド授業として、火曜日と木曜日に学んだ文型の運用力を高めるため、「書く活動」を行い、2種の作文を書かせている。一つは教科書【りかい】において課題とされている作文である。もう一つは、特定のテーマについてよりアカデミックな表現を使用して書く作文である。教科書の作文においては各テーマに従って身近で、簡単なテーマから書き始め、段階的に作文の量を増やしていきながら長文の作文に向けた練習を重ねる。そして「書く活動」では、三部構成を意識して書くこと、話し言葉と書き言葉を区別して書くこと、簡単な接続詞を適切に使用して書くことなどを念頭に置いて書く練習をする。また「コメント活動」として、学習者にはクラスメートの作文を読み、必ずコメントを書くことが求められている。このコメント活動を通して読解力とコミュニケーション能力を身に付けることを目指している。

このように本科目では、「活動→文型学習動画視聴→文法→作文（産出）」という流れで進めることで、対面授業の活動で行っている十分な口頭練習により実践的な日本語力を向上させること、およびオンデマンド授業を通して学習者の自律的な学習を促すことを実践している。

3-3. まとめと展望

2023年度からの教科書の変更とオンデマンド授業の導入に伴い、本科目の目標と授業の進め方にも変化が生じた。とりわけ、これまでの文法積み上げ式の学習からの離脱を試みていることが最も大きな変更点であると言える。現在、担当教員と学習者はこのような授業形態について戸惑っている様子が見受けられる。その一因としては本科目の新たな目

標と進め方、特にオンデマンド授業の学習方法に対する理解が不足していることが挙げられる。

本科目の新たな目標と授業の進め方は、まだ始まったばかりで課題点も見られるが、言語学習の最も根本的な目的はやはりその言語を実際に使用することであろう。本科目で試みている授業の進め方はその目的に適しているものと考えている。そして担当教員間の連携を深め、かつハイブリッド授業に対する理解が深まれば、今後、より運用力を向上させることができる科目として定着していくものと確信している。

4. 総合日本語 2

4-1. 学習の目標と内容

「総合日本語 2」は、CJL スタンダーズの初級後半レベルに位置し、初級後半の学習者を対象としている。主な目標は、基本的な文型と語彙を習得し、日常のコミュニケーションが可能なレベルに到達することである。学習者は自分の経験や身の回りの出来事について話すことや書くこと、身近な話題に関する文章を読んで理解できるようになることが期待されている。教科書は『まるごと 日本のことばと文化 初級 2 (A2) 【りかい】』『まるごと 日本のことばと文化 初級 2 (A2) 【かつどう】』を使用している。また、初級後半レベルの学習だけでなく、「初中級の文法」という時間を設け、中級前半レベルへの橋渡しに必要な文型学習を行う。

授業形態は、「総合日本語 1」と同様で、週 5 コマから成り立っており、そのうちオンデマンド授業が 2 コマ、対面授業 3 コマ（火曜日 2 限、木曜日 1, 2 限）で構成されている。オンデマンド授業では、文型学習動画を視聴し、教科書【りかい】を中心に文型や語彙を学ぶ。文型学習動画は、初級後半レベルが 50 文型、初中級レベルが 21 文型あり、各動画は「文型表紙」「導入 Introduction」「活用 Grammar」「意味 Meaning & Usage」「例文 Example」で構成されている。一方、対面授業では、主に教科書【かつどう】を使用して授業運営を行う。また、本科目では、日本語でのプレゼンテーションや説明文の執筆など、「話す活動」と「書く活動」も取り入れている。筆記テストと会話テストも対面授業の際に実施される。

4-2. 授業の特徴

本科目における特徴は、オンデマンド授業で教科書【りかい】を用いてインプットを中心に、対面授業で教科書【かつどう】を用いてアウトプットを中心に行っていることと、「書く活動」を対面で実施していることである。

オンデマンド授業では、まず、教科書【りかい】の語彙リストを使用して学習対象となっている課の新出語彙を学び、語彙クイズを受験することで、その理解度を測る。クイズは満点になるまで何度でも受験できるので、学習者の習熟度によって復習することが可能である。そのあと、当該課で扱う文型を学ぶために、文型学習動画を視聴し理解を深める。視聴後、学習者はワークシートの問題に取り組む。ワークシートでは教科書【りかい】の問題を解き、学習した文型を用いて短文を作成する。ワークシートを設定した期日

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

までに提出することで、オンデマンド授業に出席したとみなしている。学生の提出後、担当教員は、語彙クイズの受験状況と理解度を確認し、ワークシートの添削を行う。学習者に対して個別にフィードバックを行うと同時に、クラス全体に向けたフィードバックもフォーラムを用いて行う。

対面授業では教科書【かつどう】を使用し、会話やアクティビティ等を実施することで、主に口頭における産出能力を高めることを目的とする。教員と学習者、および、学習者間でインタラクティブな活動を行うことを通じて、運用能力を高めることが目標である。

「話す活動」では、日本語でプレゼンテーションを行う。ブレインストーミングやピア活動を行い、アウトラインの作成と、PPT スライドと発表メモ（スクリプト）の作成を経て、発表を実施する。「書く活動」では 400 字から 600 字の説明文を執筆する。話す活動と同様に、アウトラインの作成から第 1 稿、第 2 稿、清書の執筆を行う。最後にまとめの活動を行い、クラスメート同士でお互いに書いたものを読みあったり、コメントを書いたりする活動を行う。

本科目で特筆すべきこととして、「書く活動」を対面授業で実施していることが挙げられる。確かにライティングは、オンデマンド授業で実施するほうがじっくりと取り組むことができ、教員がフィードバックに時間をかけられるという利点もある。しかし、初級後半レベルでは文字情報のみによるフィードバックでは伝わらないという欠点もあり、学習者からの質問や教員からのアドバイスといった双方向のやりとりが難しい。それで、教員から直接指導を受けるだけでなく、学習者間のピア活動を取り入れることで、自分が書いたものを客観的に見る視点を養い、ライティングの能力を高めることを目指している。

また、「総合日本語 2」には、まとまった分量の文章を書くのが初めてという学習者も多数存在するが、「総合日本語 3」からは、短いレポートや資料を作る、日常的な事実について内容を要約して伝える、その事実についての考えを書くといったアカデミック・ライティングの活動が始まる。そのため、主体性と自律性の育成という観点から、アカデミック・ライティングへの橋渡しをするための準備が必要であり、対面授業できめ細かく指導がなされている。

「初中級の文法」の指導は、口頭でよく使用されると思われる文型は対面授業で、書き言葉の表現に近いものはオンデマンド授業で行っている。文型学習動画での自習に加え、初中級レベルの文型を運用できるように、担当教員がオンデマンド授業の課題を作成したり、対面授業で行う活動をデザインしたりしている。

4-3. まとめと展望

「総合日本語 2」の学習者のレディネスは多岐に渡っている。「総合日本語 1」から継続履修をしている学習者や、『みんなの日本語初級 I』や『初級日本語げんき 1』といった文型積み上げ式のテキストを用いた学習に慣れてきた学習者が大半を占めているが、アニメーションや YouTube といったリソースで独学した学習者もいる。そのような学習者は入門レベルから学習を開始するのとは異なり、自分なりの学習方法がある程度確立されている。そのため、新しい教科書、ハイブリッドの学習スタイルに慣れないという声も聞か

れる。今後はそのギャップをどのように埋めていくかが課題と言えよう。しかし、オンデマンド授業で文型や語彙の知識をインプットし、対面授業でアウトプットを行うというスタイルは、学習者が主体的かつ自律的に日本語学習を進めていく上で大きな利益をもたらすと考えられる。

「総合日本語2」の担当教員は、初級後半レベルならでは問題を熟知しており、各々が授業運営の工夫をして、これまで培った経験を生かして効果的にクラス運営をしている。教員からは、学習者が提出したオンデマンド課題に対し、詳細かつ有益なフィードバックがなされている。しかし、オンデマンド授業の場合、学習者がその場で担当教員に質問ができないという問題もある。特にコースの後半になると文型の難易度が上がるので、対面授業でも文型に関する質問が多く、時間を費やすこともある。初級レベルの学習においては、対面授業でのきめ細かなフォローが必要である。そのため、チームティーチングでは、オンデマンド授業担当者と対面授業担当者間で緊密な連携を取り、学習者への指導に当たっているが、今後は更なるフォローを行い、より有効な指導を実施することが求められる。

CJL スタンダーズによれば、「総合日本語2」は「総合日本語3」に向けて「基礎段階の言語使用者」から「自律した言語使用者」になるという過渡期の時期である。「総合日本語2」からのこのアーティキュレーションは重要課題であり、学習方法やカリキュラムの再考だけでなく、自律的学習者を育成するための新たなアプローチが必要であると考えられる。

5. 総合日本語3

5-1. 学習の目標と内容

「総合日本語3」は初級の学習事項を定着・拡充させながら、中級前半の文型、語彙を学習する科目である。社会の身近なテーマについて他者の考えを知り、自らの考えを発信できるようになることを目標としている。教科書は『まるごと 日本のことばと文化 中級1 (B1)』を使用している。その他にも、プレゼンテーション活動やレポート活動を通して、大学の講義や活動で必要となるアカデミック・ジャパニーズとしての日本語の学習をスタートさせる科目となっている。

1週間のスケジュールは、オンデマンド授業がオンデマンド授業(1)とオンデマンド授業(2)の2コマ、対面授業が3コマ(月曜日2限、水曜日1, 2限)の合計5コマである。オンデマンド授業(1)とオンデマンド授業(2)の一部では文型動画を視聴して文型学習を行う。文型学習動画は、63文型用意されており、その他にアカデミック・ジャパニーズ文型(以下、「アカデミック文型」)が8文型ある。各動画は「文型表紙」「例文」「文型説明」「留意点」で構成されている。

オンデマンド授業(1)は、文型を学習する授業である。学習者は文型学習動画を視聴し、自ら様々なリソースにアクセスしながら自律的に文型理解を深めていく。教員は、学習者が提出した課題等から理解の程度を確認し、フィードバックを行っている。また、本授業は対面授業の1コマと連動している。対面授業では学習者の文型理解の程度を踏まえ

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

た上で文型の復習を行っており、反転授業の形態が可能となっている。さらに、教科書の内容に沿って口頭表現活動を行っている。

オンデマンド授業（2）は、アカデミック・ジャパニーズの読解・ライティングを学習する授業である。WMにある教材を学習し、課題に取り組むことによって、アカデミックな日本語運用能力を高めていく。教員は、学習者が提出した課題等から理解の程度を確認し、フィードバックを行っている。

さらに対面授業の3コマで、教科書のテーマに沿った口頭表現の活動を通して日本語運用能力を高めていく。このコマでは、語彙・表現の学習も行う。教員は授業内でピア・ラーニングやディスカッション等を積極的に用いながら学習者間の学びの場を提供し、学びを促している。

以上の5コマの授業を通し、学習者の主体性・自律性を育みながら日本語の運用能力を高めていくことを目指している。

5-2. 授業の特徴

本科目も他の総合日本語の科目と同様、ハイブリッド型授業となっており、様々な工夫を施している。本稿では、そのうちの3点を紹介する。

1点目は、本科目の文型学習における工夫である。本科目においても文型学習動画が用意されているが、「総合日本語1」、「総合日本語2」と大きく異なる点は、日本語による文型説明がなされている点である。やさしい日本語によって文型のポイントが説明されており、中級レベルとしてのリスニング力も必要とされる。本動画を文型の導入として活用し、学習者は自分に合った様々なリソースにアクセスしながら文型の理解を深めていく仕組みとなっている。その後、WM上の「文型クイズ」を受け、自分の文型理解を確認していく。この「文型クイズ」は、理解度を測るものとしてだけでなく、教材リソースの一つとして活用できるよう、制限時間を設けずに、わからないところがあった場合は、自分で調べながら答えることができる仕組みとなっている。

2点目は、オンデマンド授業の「振り返り」である。オンデマンド授業（1）および（2）では、授業ごとに「振り返り」の課題が出され、学習者は、その週に学習した内容を振り返ることができる仕組みとなっている。記入する内容は、当該週のオンデマンド授業でわかったこと、難しかったこと、質問等である。さらにオンデマンド授業（2）においては、前の週の課題で教員が行ったフィードバックを読んだ上で、わかったこと、難しかったことも記入することが求められており、学習者が教員のフィードバックを理解したかどうか分かる工夫が施されている。本「振り返り」は、オンデマンド授業において学習者が質問できる場を提供するものであるが、教員も学習者の理解の程度を確認できる場となっている。教員はこの「振り返り」を活用して学習者一人一人とやり取りを行い、オンデマンド授業における学習者のサポートを行っている。

3点目は、チームティーチングとしての教員間の連携である。本科目においても各クラス2、3人のチームティーチングが行われている。科目開講当初、オンデマンド授業（2）のみ担当する教員は学習者と直接会うことなく、WM上でやり取りを行っているため、学習者の顔が見えず、指導が難しいという声が挙がっていた。そこで、チームティーチ

ングの利点を活かし、対面授業の教員がオンデマンド授業(2)を担当している教員のサポートを行うこととした。現在、対面授業の教員とオンライン授業(2)を担当する教員がWMの掲示板でメッセージのやり取りを行い、対面授業の教員が自分の授業でオンデマンド授業の課題を学習者に説明したり、課題未提出者に提出を促したりすることで、オンデマンド授業(2)の教員のサポートを行っている。さらに、コマごとに異なる活動を行うのではなく、コマの枠を超えた活動を取り入れることで教員間の連携を図っている。この活動は、学習者がアカデミック・ジャパニーズとしての最終プレゼンテーションおよび最終レポートを作成するための活動で、科目を通して対面授業を担当する教員とオンデマンド授業(2)を担当する教員と一緒に準備を行っていくものである。教員が連携を図り、最終活動に向けて、協働して仕上げていく。最後に、学習者の承諾が得られた場合、学習者の顔がわかるよう対面授業の教員が「クラス写真を撮ってWMにアップする」、オンデマンド授業(2)の教員からの希望があった場合は、「教員の自己紹介動画をWMにアップする」、「対面授業内でオンデマンド授業(2)の教員をZoomで繋ぐ」、「オンデマンド授業(2)の教員が対面授業に一部参加する」等の様々な方法によってオンデマンド授業(2)を担当する教員と学習者との関係づくりを行っている。これらの方法は教員の声を反映させたものであるが、これらを実現させるためには、対面授業の教員のサポートが欠かせない。教員間の連携が円滑な授業の一助となっている。

5-3. まとめと展望

本科目は現在も各学期でスケジュールを見直し、ハイブリッドの利点を最大限発揮すべく、調整・工夫を行っている。学習者が主体性・自律性を育みながら学習を進められるよう指導するには、科目を担当する全ての教員がCJLの理念を理解し、「Waseda CJL 日本語教育スタンダード」の考え方にに基づき、授業を行う必要がある。現在、科目を担当する教員から気づいた点や意見がもらえるようGoogleシートを設置し、いつでも書き込めるようにしているが、今後、教員間で意見交換ができる場を増やしていくことにより、教員の多くの声を拾い、科目の改善を行っていく予定である。

また、現在、CJLに入学して間もない学習者がオンデマンド授業に適応できないというケースもみられているため、学習者がオンデマンド授業の利点を活かしながら学習を進められるように指導することが重要である。今後、本科目の学習方法に関する説明動画を作成する等の方法により、学習者のサポートを行っていく予定である。

さらに、「総合日本語2」と「総合日本語4」とのアーティキュレーションに配慮し、指導内容の調整を行っていくことで、学習者のレベルに合った科目を提供することが重要である。今後も調整・工夫を絶えず加えていくことで、本科目が学習者の多くの学びを促進させるものとなることを目指す。

6. 総合日本語4

6-1. 学習の目標と内容

「総合日本語4」はCJLスタンダードの中級後半のレベルで、中級レベルの日本語力を

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

確立し、上級へ進むための土台を作るレベルである。目標として大きく二つの柱を立てている。一つ目の柱は身近な話題、一般的な話題を扱うことができる4技能の能力をつけることである。日常生活の話題から一歩進み、身近な社会問題についても話し、聞き、読み、書くことができるようになることを目指している。二つ目の柱はアカデミックな分野における日本語使用の基礎を築くことである。アカデミックな分野で使用される文体や語彙・表現を学習し、それらを用いた文章の読み書きができるようになることで、中上級、上級レベルへと進むための基礎的な能力を身につけることを目指している。教科書は『まるとと 日本のことばと文化 中級2 (B1)』を使用している。

授業形態は、週5コマのうちオンデマンド授業が2コマ、対面授業が3コマ（月曜日2限、水曜日1, 2限）である。学習内容として、上記の一つ目の柱については、テキストを用いた活動、および、口頭表現活動として発表活動を行い、二つ目の柱については、アカデミック・ジャパニーズの読解とアカデミック文型の学習、ならびに、意見文を書く活動を行っている。

オンデマンド授業は、学習対象の文型を紹介・説明する文型学習動画による学習が中心である。文型学習動画は、テキストで「文法・文型」として扱われている70文型と、アカデミック文型として選択した21文型を対象としている。文型学習動画は、「文型表紙」に続き、まず各文型の例文を提示して意味を予想させた後に、接続・意味・使い方・使用の際の留意点を日本語で説明するものである。学習者は文型学習動画を視聴し、課題を行うことになっている。テキストの文型は、対面授業でテキストの該当の課を扱う前に文型学習動画で予め学習し、アカデミック文型は、テキスト外の読解文の中で提示し、読解活動と合わせて学習する。その他、意見文の活動についても、オンデマンド授業の中で行っている。意見文の活動は導入部分を対面授業で行い、その後は主にオンデマンド授業において、書き方の説明と練習のシートにより学習を進める形を取っている。

6-2. 授業の特徴

本科目では、ハイブリッド化においては、文型動画視聴後の課題等のオンデマンド授業の課題の工夫と、オンデマンド授業と対面授業との連携が重要と考え、それらの点に配慮した授業運営を行っている。しかしながら、上述した点の重要性は2023年春学期のハイブリッド型授業開始当初には十分に認識できていなかった。授業を重ねる中で、オンデマンド授業の難しさに気づき、より効果的な学習を可能にするため、修正と工夫を行っている。

オンデマンド授業開始当初は、文型学習動画によりある程度学習者が文型の意味や使い方を理解できると想定していた。そのため、文型学習動画の視聴後の課題は、理解の確認のための短文作成、および、オンラインのクイズ（文型の選択問題）とし、理解の不十分な部分は課題に対するフィードバックによって補うことになっていた。つまり、オンデマンド授業の指導内容はオンデマンド授業内で完結できると予想し、対面授業とは連携させていなかったのである。しかし、実際に授業を行ってみると、文型学習動画の視聴と短文作成の課題、クイズのみでは十分な理解を得るのが難しいことが明らかになった。理由として、次の三つが考えられた。それは、①文型学習動画をきちんと視聴しない学習者が多

い、②文型学習動画を視聴しても内容が理解できないケースがある、③短文作成課題に対するフィードバックを見ない学習者が多い、という3点である。そして、その根底には、学習者が課題を期限内に提出することに追われ、個々の課題に十分に時間を割く余裕がないことがあると思われた。また、このレベルでは、日本語のみによる指示や説明では理解が難しい学習者も多く、対面授業で理解の不十分な部分を補う必要があることも分かった。

上記の問題の解決に向け、まず、文型学習動画の視聴と理解を促すため、オンデマンド授業の課題シートの改良を行った。課題シートに、文型学習動画で紹介されている例文を一つ書き取る問題を入れ、文型学習動画の内容の理解を促すため、文型の使い方や留意点の説明のポイントを文字で示した。そして、テキストの文型についての練習問題や、正しい使い方の文を選ぶ自作の問題をさせ、最後に短文を作らせる構成にした。

また、課題に対するフィードバックを生かし、それによる理解を確実にするため、オンデマンド授業と対面授業との連携を図ることにした。すなわち、対面授業において、誤りの多かった点を中心に説明の補足や確認を行うようにした。オンデマンド授業のみで対面授業を担当しない教員は、課題で誤りの多かった点や補足が必要な点を対面授業の担当者に授業記録で報告することとした。さらに、文型の理解確認のためのオンラインクイズについても、対面授業において誤りの多かった点を解説し、質問に答えるようにした。

オンデマンド授業では、課題の指示も日本語の文字によるため、指示が正確に伝わらないケースが多く、理解できているかの確認も難しい。そのため、課題の提出方法をできる限り簡潔で分かりやすくし、課題の内容より提出すること自体にエネルギーを割かれることのないようにした。また、この点においても対面授業との連携を密にし、課題提出のリマインドや課題提出が滞りがちな学習者の状況確認を対面授業で行うようにした。

上記の工夫を行ったことで、オンデマンド授業開始時に見られた問題はかなり解消することができた。オンデマンド授業の内容を対面授業で扱うことで、オンデマンド授業の内容理解がより確実になり、文型学習動画による学習が効果的に行えるようになってきている。課題の工夫、および、オンデマンド授業と対面授業を連携させ、対面授業においてオンデマンド授業の内容を確認しつつ、それを基にした活動を行うというパターンを取ることが、総合4の授業の特徴と言えるであろう。

6-3. まとめと展望

今回のオンデマンド授業の実践を通し、オンデマンド授業を行う上での留意点が二つ明らかになったように思われる。第一に、オンデマンド教材の理解を助け、理解の程度を確認する教材の必要性である。学習者にとって学習言語を用いた動画の内容を十分に理解するのは難しく、理解を助ける工夫が必要である。今回の実践においては、課題シートの工夫がそれにあたる。第二に、対面授業との連携により、オンデマンド授業がより効果的に行えるということである。学習者に直接接することのないオンデマンド授業では、学習意欲の高い学習者でなければ、提出した課題のフィードバックをしっかりと確認し、そこから学ぶことは難しいであろう。対面授業において課題での誤りを取り上げ、指導することで、より正確な理解を促すことができる。また、オンデマンド授業による自律的な学習が

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

うまくできず、教員による直接の支援が必要な学習者も、決して少なくないと思われる。

今後の課題としては、まず、学習者が自らの弱点や学習が不足している部分に気づき、より自律的に学べるようにすることがある。学習すべき点に気づかせ、それについて自ら調べる機会となるような課題の工夫ができないかと考えている。さらに、総合4については、文章表現の指導のためのオンデマンド教材の開発が必要であり、大きな課題である。本科目では、レポート等のアカデミックな分野の日本語への入り口として硬い文章の文体や文章の構成などを指導しているが、現在は文体の導入部分を対面授業で行い、その後はオンデマンドの課題シートにおける日本語の文章での説明と練習問題によっている。説明のための分かりやすい動画の開発が望ましいと思われる。

7. 今後の課題と可能性

本稿の目的は、2023年度より開始した総合科目群のオンライン化について、「総合日本語1」から「総合日本語4」の事例をもとに、その課題と展望を述べることであった。「総合日本語1」から「総合日本語4」におけるハイブリッド型授業は、2023年度春学期から開始し、現在2学期目となる。春学期終了後に振り返りを行って課題を整理し、それらを解決・改善するための方策を検討した。秋学期はその方策を具体的に実施しており、少しずつ成果も見えてきている。

上述の各レベルにおける指摘と重複するが、ハイブリッド型授業の導入時に観察された課題は次の3点であったと考えられる。

- (1) 学習者、教員がいかにハイブリッド型授業の形態に慣れ、授業の目的、内容、効果について十分な共通認識を得られるようになるか。
- (2) 特にオンデマンド授業において、課題の質、および教員と学習者のコミュニケーションの質をいかに担保していくか。
- (3) オンデマンド授業担当教員と対面授業担当教員の連携をいかに深めていくか。

これらの課題を解決・改善すべく、各レベルコーディネーターが各レベルの特性を踏まえて模索を繰り返し、対応している状況については、本稿3章から6章の報告の通りである。現状は確実に改善の方向に向かっていると言える。

無論、授業形態のみならず、学習者や担当教員、学習内容が変われば、新たな課題が生まれるため、授業改善の試みは今後も続くと考えられる。特にCJLにおいては、主体性・自律性を尊重した履修システムと、多様な学習者の受け入れという現代の時代的要請により、解決すべき課題もさらに複雑になっているからである。実際に以前から、学習者に履修科目を自由選択させることにより、日本語能力レベルの大きく異なる学習者が同一科目を履修するという事態が生じている。また、多様な学習者の中には、自身の学習管理が困難な者も存在している。今後は、日本語能力が不足している学習者や、学習の継続に困難を抱える学習者をハイブリッド型授業で主体的・自律的に学習させるにはどうすればよいのかという課題にも対応していかなければならない。

CJLでは、それらの課題に対する対応策として、以前から、TAおよびボランティアの活用や、日本語自律学習支援施設による自律学習支援を行っている。教室内外における学

習環境を整え、学習者一人一人の学びに寄り添っていくことを目指している。

CJLは国内最大規模の日本語教育機関であり、その教育理念と学習環境を信頼する学習者が世界中から集まってきている。そのような学習者の期待に応え、日本語教育の面からその成長に寄り添うことがCJLの使命であると考え。その根幹にあるのは、「21世紀市民」「地球市民」を育成するという大きな課題である。その課題を遂行していくために、今後も引き続き、よりよい授業とはどのようなものなのかという問いについて模索し、改善に向けた取り組みを続けていきたいと考える。

注

- 1) 本稿の執筆者と担当章は以下の通りである。
寅丸真澄（とらまるますみ、1章・2章・7章）、鄭在喜（ちょんじえひ、3章）、吉田好美（よしだよしみ、4章）、大久保雅子（おおくぼまさこ、5章）、三好裕子（みよしゆうこ、6章）
- 2) CJLのディプロマ・ポリシーでは、「地球社会の中で、既成の国籍や文化では規定することができない複数の文化・言語を合わせ持ち、主体的に考え、他者と協働的に行動していくことができる人材の育成を目指す。問題発見解決力、創造的構想力、批判的精神、異文化理解を通して、新たな社会を創出できる地球市民を輩出する。」とされている。
- 3) VUCAとは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の略である。
- 4) CJL内に設置された日本語自律学習支援室「わせだ日本語サポート」において、大学院生スタッフが授業外のピア・サポートを行っている。詳細は寅丸・吉田（2021）を参照。
- 5) 詳細はシラバス（<https://www.waseda.jp/inst/cjl/students/registration/download/>）参照。

参考文献

- 池上摩希子（2023）「2023年度に向けた日本語教育研究センターの課題と展望—「ことばの学びの中継点」を「世界へ向かうプラットフォーム」に—」『早稲田日本語教育実践研究』11, 5-8.
- 岩下智彦・寅丸真澄・伊藤奈津美・沖本与子・井下田貴子・三谷彩華（2023a）「CJLで学ぶ日本語学習者を対象としたComputer Based Test開発—学習者による自律的なレベル選択の指標の開発過程—」『早稲田日本語教育実践研究』11, 23-38.
- 岩下智彦・寅丸真澄・伊藤奈津美・沖本与子・井下田貴子・三谷彩華（2023b）「上級レベル学習者の日本語能力を認定するための読解・聴解オンラインテストの開発」『早稲田日本語教育実践研究』11, 71-78.
- 木下直子（2020）「学習効果を高めるブレンディッド・ラーニングの導入を目指して—日本語初級e-learning教材“Steps in Japanese for Beginners”の開発—」『早稲田日本語教育実践研究』8, 5-12.
- 久保田美子・濱川祐紀代（2022）「「CJLスタンダード」の開発—「ことばの学びの中継点」の役割を果たすために—」『早稲田日本語教育実践研究』10, 5-18.
- 館岡洋子（2016）「ことばの学びの中継点として—多様性、主体性、開放性をもったCJLへ—」『早稲田日本語教育実践研究』4, 3-6.
- 寅丸真澄・吉田好美（2021）「「わせだ日本語サポート」の挑戦—全留学生に開かれた日本語自律学習支援を目指して—」『早稲田日本語教育実践研究』9, 3-10.
- 寅丸真澄・井下田貴子・伊藤奈津美・岩下智彦・沖本与子（2021）「CJLで学ぶ学習者のためのレベル判定テスト開発」『早稲田日本語教育実践研究』9, 67-70.
- 寅丸真澄・井下田貴子・伊藤奈津美・沖本与子・久保圭・芹川佳子（2022）「CJLで学ぶ学習者

早稲田大学日本語教育研究センター／CJL 総合科目群オンライン化プロジェクトの展開

のためのレベル判定テスト開発」『早稲田日本語教育実践研究』10, 79-82.

寅丸真澄・木下直子・久保田美子・井下田貴子・久保圭・濱川祐紀代・伊藤奈津美・沖本与子・齋藤智美・武田誠・鄭在喜・吉田好美（2022）「CJL 総合科目群オンライン化のための研究プロジェクト」『早稲田日本語教育実践研究』10, 83-86.

寅丸真澄・木下直子・久保田美子・井下田貴子・伊藤奈津美・大久保雅子・久保圭・濱川祐紀代・齋藤智美・武田誠・鄭在喜・吉田好美（2023）「CJL 総合科目群オンライン化のための研究プロジェクト」『早稲田日本語教育実践研究』11, 97-100.

（早稲田大学日本語教育研究センター）